



勝利至上主義の「落とし穴」



『今の評価』は『未来の評価』ではない

なぜ、メンバー全員のプレイ機会は“同等”でなければならないのか

成長期は、同じ学年でも成長度にプラスマイナス2～3才のズレがあり、4学年程度（学術的には最大6学年）の成長の差が発生します。これは気持ちの問題ではありません。同じ学年で競争したら、高い評価を受けるのは早熟タイプです。晩熟タイプは、成長速度が遅いだけに低い評価をされてしまいます。大人なら知っているはずです。小学生の頃は自分より背が低かった子に高校生になって再会したら見下ろされた経験、ありますよね。小学生の頃は足が遅かったのに18才頃になって瞬足になった人もたくさんいます。

『チームの勝利』を重視した活動は『早熟な子の優遇』となります！

『チームの勝利』を重視した活動をした場合、以下のような状況に陥ります。

チームの勝利を優先した活動の「落とし穴」とは？

レギュラーを早めに決め、固定メンバーでテストマッチを重ねる。レギュラーメンバーはケガをしていても出場する。

- ケガの悪化 ➡ 育成年代は試合のためにケガを悪化させてはいけない。休むことが未来への投資。
- 傲慢な人格の形成 ➡ 若い時期に優遇されることは、本人を勘違いさせることになる。
- 同じメンバーでしか連携が取れなくなる ➡ 思考の柔軟性がなくなる。

1日に2～3試合（たとえ暑い季節でも）。しかし、出場メンバーは毎試合同じような顔ぶれ。

- 少年スポーツではおなじみの光景。強制的に運動過剰になると、中学生になってからのケガの確率が高まる。
- レギュラーが疲れきり、サブは運動不足。格差が広がるばかりで競争にならない。

身体的成長が遅い子ども（背が低い、足が遅い、キック力が無いなど）は、励まされるわりには、試合には出場させてもらえない。

- 人間不信になる。 ●自己肯定感が育たない。
- 成長期を終えて周囲に劣らなくなっても、その心理からなかなか脱却できない。
- 経験不足になり、成長期を終えた時点での競争で不利になる。

「各自の上達」より「チームが負けなため」を優先し、適前に前方に蹴るプレイを推奨する。

- サッカーという種目特有の魅力を否定している。（プロですらミスの多いスポーツ）
- 育成年代は積極性を養わなければならないのに、負けを恐れる経験をチームで積み重ねる。
- 「やりたいポジション」より「与えられたポジション」が優先される。
 - ・足が速いからフォワード（攻撃）
➡ しかし決断力が無く、シュートが苦手。
 - ・背が高いからキーパー
➡ しかし反射神経は弱く、失敗すると落ち込みやすい性格。
 - ・キック力があるからディフェンス（守備）
➡ しかし自分から当たりに行くのが恐い。

大会当日、レギュラーなのにケガや体調不良で出場できなくなった場合、保護者が謝る。

- 自己管理できない子どものために、本番に向けて保護者が体調管理のプレッシャーを担う。
- 家族の一員、学校の一員であることより、チームの一員であることが優先される。

子どものスポーツ環境では『個の育成』を優先させるべきです！

『他の子と比べないで』身体の成長速度、脳の成長速度、どちらも人それぞれです！

メンバー全員が練習・試合ともに同等にプレイ機会を得ることこそ
健全な子どものスポーツ環境です！